



日本学術振興会特別研究員になって ～女性研究者を目指して～

柳原 佳奈



日本学術振興会特別研究員に採択されて

私は現在、福井大学博士後期課程3年に在学し、研究に没頭する日々を送っています。今年になって、細胞培養工学に基づいた研究テーマで日本学術振興会の特別研究員DC2に採択されました。このような機会に恵まれたのも、研究を指導してくださった先生のおかげであると思います。

研究室に配属されたばかりの頃は、研究をすることへの憧れのみで漠然と実験をしていました。しかし、学会発表や日々の研究活動を通じて研究の醍醐味や面白さ、そしてやりがいを強く感じるようになり、科学者への熱い想いが大きくなっていきました。特別研究員への採択は、私のこの気持ちが通じたようで、大変嬉しく思っています。

博士課程進学のかきかけ

私は、もともと一つのことに熱中するタイプだったので、研究というフィールドは自分に向いているのではないかと考え、大学に入学した当初から博士課程への進学を考えていました。しかし、いざ研究を始めてみると、研究が思ったように進まなかったり、努力が無駄に終わってしまうことが多く、「自分には研究が向いてないのでは」と何度もくじけそうになりました。そんなことが続き、修士課程のころ、私はなんのために研究しているのか、なにが面白いのかわからなくなった時期がありました。

このような時期を打破できたきっかけは、生物工学会若手の会でした。会を通じて他大学の先生や学生さんと親しくなれ、研究について熱く語り合ったり論議したりすることで、多彩な研究に触れることができ、再び研究が楽しいと思えるようになりました。加えて、幸運にも笹川科学研究助成に採択され、「自分の研究が学外で評価されている！」という自信を持つことができ、研究のやりがいを再認識できたのです。これらのことが励みとなって、失敗してもあきらめない忍耐力が生まれ、研究の特徴や特色を生かすにはどのように研究を展開させていけばいいかを考えるようになりました。自分の研究と向き合うことで、研究の全体像を捉えることができるようになり、徐々に成果が出るようになりました。このつらい時期を乗り越えたことで、研究者としてやっていきたいという想いがますます強くなり、博士課程への進学を決意しました。

博士課程に進学して

私は一つの研究室にいと視野が狭くなってしまうの

ではないかと考え、他大学への進学を悩みました。指導していただいている先生に相談したところ、研究室に在籍し、しばらくの間、研究は農業生物資源研究所の竹澤俊明先生のところで行うことを勧められました。将来、行政の研究機関への就職も考えていた私は、先生のアドバイスのに従い、農生研に向かったのです。研究所では農学的観点からの戦略で進められており、工学部の私にとっては大変目新しいものでした。実験では、ラットから胎子を摘出したりと初めての作業が多く貴重な経験をさせていただきました。また農学部をはじめ、薬学部などのさまざまなバックグラウンドをもった研究者と論議できたことは私にとって財産になりました。さらに、研究者として生きる厳しさを教わりました。研究することに対してどんなに甘かったか知ると同時に、職業としての研究者は皆必死で研究していることを知りました。

この農生研での成果で、特許を出願し、論文を作成することができました。現在は福井大学に戻り、従来から行ってきた研究に従事していますが、工学部としての視点に加え、農生研で学んだ観点を加味して研究に取り組むことができています。

女性研究者として

現在では、女性がアカデミックで研究するのは厳しいといわれ、女性教授は全体の4%程度であり、特に理工系はさらに少ないとのこと。大変不安な現状ではありますが、私は前例が少ないだけで基本的に男女差はないと考えています。修士の頃に女性であることを不安に思っていたのですが、女性の先輩を見ていて、研究がしたいと思うなら女性だからと臆する前に挑戦するべきだということを教わりました。私は将来、工学系で研究を続け、若い女性研究者の目標になれるくらいに活躍できる研究者になっていきたいです。

最近、大学教員の女性比率の増加の動きや、理工学系女性研究者への支援など女性研究者への追い風が吹いていると感じることが多くなりました。今後研究者として今以上に女性にとってよりよい環境が広がっていくと考えています。

私がこれまで研究者を目指して続けてこられたのは、①チャレンジ精神、②忍耐力、③絶対あきらめない！という強い意志がすべてであったように思います。また、指導してくださった先生方との出会いは研究者としての転機であったと確信しています。今後は多くの先生方との出会いを大切に、影響しあえる関係を築いていきたいと思っています。